

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24560791

研究課題名(和文) 中近世のイタリア都市における街路空間の変容に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A study on the metamorphosis of the street space in the late-medieval and early modern Italian cities

研究代表者

片山 伸也 (Katayama, Shinya)

日本女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：80440072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イタリアの3都市(シエナ、フィレンツェ、ローマ)における中世から近世ルネサンスにかけての街路区間の変容について分析を行った。各都市のパラッツォについて、ファサードの仕上げおよび開口部の形状によって類型化すると共にその分布状況と史料から明らかとなる各エリアの社会状況との相関関係を考察し、フィレンツェのパラッツォのルネサンス様式が都市内に敷衍していく過程と街路空間および都市構造の変化の同時性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, focusing on three Italian cities (Siena, Florence, Rome), the metamorphosis of the street space in the late-medieval and early modern period is analyzed. The palazzi of each city is sorted by the finish and the shape of the windows and doorways of the facade. Furthermore, by considering the interrelation between the social condition of each district and the distribution of each palazzo type in the city, it is revealed that the processes of the diffusion of Florence Palazzo's Renaissance style and the changes of the street space is going on simultaneously.

研究分野：都市史

キーワード：イタリア都市 中世 ルネサンス 街路空間 ファサード

1. 研究開始当初の背景

これまでの都市史研究においては、中世都市の街路構成は自然発生的なものであり、今日でいう都市計画的な直線道路の敷設はルネサンスにおける透視図法の再発見を待つ必要があるとみなされてきた。事実、中世都市の街路は屈曲し、そこに俯瞰的な都市計画を見出すことは難しい。また、中世後期の密集した都市中心部では木造のバルコニーもしくは増築部が街路にはみ出すのが一般的であったし、建物の壁面線も揃わず、曲がりくねった街路が普通であった。一方でルネサンス期の建築における透視図法の再発見は都市空間にもおよび、フィレンツェおよびローマにおいて直線的街路が整備され、バロック期におけるローマ教皇の都市整備あるいはパレルモにおけるクアットロカンティの整備へとその規模は拡大されていく。

しかし、ルネサンスにおける透視図法的直線道路の出現には道路境界を構成する建物前面壁面の平滑化がまずあったはずである。構造壁面の露出と壁面線の連続があつて初めてファサードの壮麗化と街路の直線化が発想されるのである。この点についてこれまでの建築史研究では、中世後期の住居建築から14世紀以降バルコニー的な木造の突出部が次第に否定されて構造壁が露出するようになることとパラッツォにおける意匠的ファサードの成立の同時期性が指摘されている^{註1}(図1)。しかし、当時の都市条例が定めた壁面線を揃えることによる街路空間の平滑化との同時性については指摘されず、議論は一足飛びに道路の拡幅と直線化による透視図法的演出へと移行している。

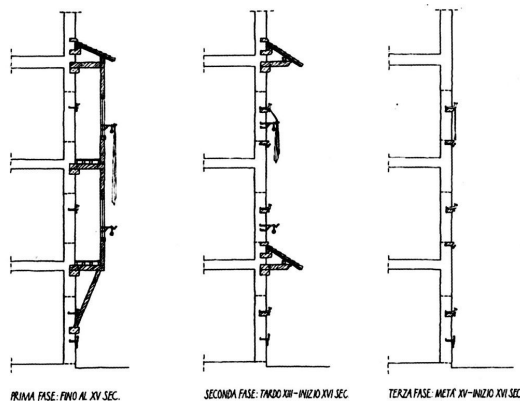


図1 中近世シエナのパラッツォ断面構成

出典：M. Quast, *Gli strati delle facciate senesi medievali e rinascimentali: Componenti, funzione, cronologia*, 2002.

一方で研究代表者の片山はシエナの13・14世紀の都市条例を参照して、このような街路空間の変化が当時の支配階層を構成していた商人市民によって都市の美観のために実現されたことを明らかにするとともに、建物壁面に残る装飾的要素の分布から中世後期シエナの主要街路に形成された都市景観を提示した^{註2}。当時のコムーネの支配層を構成していた商人階級が目指した「美しい都市」

としての平滑で視認性のよい街路空間がその後のルネサンス以降の壮麗なファサードで飾られた透視図法的な街路空間を準備したのではないかというのが、本研究の仮説的前提である。

2. 研究の目的

本研究では、イタリアの代表的な歴史都市(シエナ、フィレンツェ、ローマ)について、史料の分析と実地調査によって、中世後期から近世(ルネサンス・バロック)にかけての街路空間の「直線化」と「壮麗化」がなぜ起きたのか、中世後期の街路空間の平滑化とルネサンス以降のパラッツォのファサードの壮麗化および透視図法的直線道路の整備の関係性を文献史料と実地調査による時代ごとの空間特性の抽出によって明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

中世後期から近世にかけての都市改変があり、同時期の都市条例が残っているイタリア都市の中から、中世後期・ルネサンス期・バロック期それぞれの街路空間の典型的事例と言えるシエナ、フィレンツェ、ローマを対象として街路空間の変容を分析した。ただし、中世後期からルネサンスへの過渡期における都市空間の変容に着目した本研究の目的に鑑みて、中世最後期である14世紀からシエナについてはパンドルフォ・ペトルッチ(1452-1512)の時代、フィレンツェについてはロレンツォ・デ・メディチ(1449-1492)の時代、ローマについてもバロック期以前の教皇ユリウス 世(在位 1503-1513)の時代までを対象期間とした。

分析方法としては、

- ・史料分析：先行研究に基づく都市条例および街路整備のための役職の設置に関する記録文書、絵画史料の解釈。
- ・実地調査：写真および目視調査によるファサード構成の分析とデータベースの作成ならびにGISデータ化による街路空間の構成的特徴の分析。

を行った。

史料的データと実地調査データをGISソフト上で統合整理して相互参照可能にし、史料から得られる各時代の街路空間の様態を実地調査と照らしながら総合的に復元し考察を行った。

4. 研究成果

(1)シエナの街路空間に関する分析

ルネサンス期シエナの都市景観の変化

シエナのメインストリートである「ストラダ・ロマーナ」は1241年にレンガで舗装された最初の通りであり、政府は最も特別な整備対象として考えていた。それはストラダ・ロマーナの整備に特化したヴィアリ Viarii と呼ばれる機関が発足されたことから窺える。やがて道路の整備が進むにつれ政

府は次第に道路の周辺部分にも焦点を向け始めた。中世とは一変した都市の再編を期待した政府は、新たにオルナート *Ufficiali sopra all'Ornato* と呼ばれる機関を15世紀半ばに設立し、道路の周辺部分の審美的審査を行った。オルナートが行った政策の中で特に着目すべきことは個人の所有するパラッツォのファサードで修繕が必要な箇所を監督し、修繕するための助成を交付するよう政府に要請するということである。元よりレンガがなどの現物支給という形では助成は行われてきたが、オルナートによる支援は土地利権としての奨励金、物資の免税、直接的な金融支援など非常に多様な助成金の形式に富んでいた。その上で、肝心のファサードの形態に関する細かな言及は殆どしなかったのである^{註3}。つまり、パラッツォのもつファサードの最終的な形態はパラッツォ所有者の裁量により決定されており、オルナートによる都市の再編活動は場当たりのに進んだのであった。この頃フィレンツェではルネサンスの文化が開花し、フィレンツェ都市内には石積みのルスティカ仕上げの壁面、半円アーチ形状の開口を持つパラッツォが次々と建設された。人文主義者であったピウス世が教皇に選ばれたことは、シエナにも新たなルネサンスの文化を積極的に導入するきっかけになったとされている。そのため、シエナにおいてもフィレンツェ同様の構成要素を持つパラッツォが積極的に取り入れられたのではないかと考えられる。このようなオルナートの政策による都市の再編活動は、フィレンツェの要素を都市内に取り入れることによって、外交や経済政策のさらなる繁栄を見込んでいたのではないかと考えられる。

パラッツォの類型化

このような背景を踏まえ、シエナの都市内にはシエナ風以外にもルネサンスの影響を受けたフィレンツェ風の構成要素を用いたパラッツォが多く存在する。対象とした73件のパラッツォについて写真による形態分析を行い、ファサードの構成要素を項目ごとに評価し影響度合いによってパラッツォの分布を図2に示す。最もシエナの要素が多いと評価されたパラッツォは16件存在し、フィレンツェ風との折衷形式のパラッツォは57件にも上る。ルネサンス的要素を最も含むパラッツォは5件あった。その内パラッツォ・スパンノッキは、1473年～1475年にかけてフィレンツェの建築家ジュリアーノ・ダ・マイアーノによって建設された。建設にはシエナの銀行家、ピウス世の会計官が携わっており都市単位での重大な計画だったことがわかる。また14世紀前半にシエナのパラッツォの慣習を打ち破ったとされるパラッツォ・ロッシを意識して建設したとされている^{註4}。パラッツォ・ロッシはパラッツォの両側にカヴェルノーゾで出来た塔を構え、地階にアルコセネーゼの開口を持つという点でシエナ風の特徴がある。一方で壁面素材

は鮮新世砂岩と呼ばれる黄色の石材を用い、壁面仕上げは粗いルスティカであることからフィレンツェ風の特徴も持ち、初期の折衷形式のパラッツォとして知られる。パラッツォ・スパンノッキはロッシと同じ鮮新世砂岩を用いながらも、整形した石材での仕上げであり、尚且つ半円アーチの開口を持つことから、フィレンツェ的な構成要素をより多く用いることで中世的シエナの伝統からの乖離をパラッツォに投影しているのであろう。分布を見るとシエナ風のパラッツォはカンポ広場以南に複数隣り合って分布していることがわかる。また、最もフィレンツェ的と評価された5件の内3件はストラダ・ローマ沿いに位置している。また、シエナ風と評価された16件のパラッツォの内、少なくとも7件が15世紀に建設もしくは改築が行われており、パラッツォにおけるシエナの要素とフィレンツェ的要素の使用は同時並行的に進んでいたことがわかった。



図2 シエナの主要道路とパラッツォの分布

(2) フィレンツェの街路空間に関する分析

パラッツォのファサード

フィレンツェに現存する14～16世紀に建設されたパラッツォを対象として、ファサードの構成要素および仕上げについて現地調査を行った^{註5}。分類に用いた要素は、壁面の仕上げ材(石積み、漆喰、レンガなど)、開口部の形状(半円アーチ、尖頭アーチ、扁平アーチ、矩形など)、ファサード装飾(コーニス、端部石積み、紋章の有無など)である。

・壁面の仕上げ

1階がルスティカ仕上げ(図3)のものは13・14世紀に建てられた古いものが多く、分布状況に偏りは見られなかった。1階から3階までが石積みのものについても13・14世紀に建てられた古いものが多く、都市の中心部に多く見られた。逆に1階から3階までが漆喰仕上げのものは16・17世紀に建てられた新しいものが多く、8件中6件がアルノ川

左岸のマッジョ通りに集中していた。



図3 1階がルスティカ仕上げのパラッツォ

・店舗開口と中2階の窓開口

1階の開口が掃出しになっている店舗開口は中世後期に建てられたパラッツォに多く見られ、分布状況はマッジョ通り沿いには少なくほとんどが街の中心部に集中していた。これは、教皇レオ10世が1515年の入市式の通り道を整備するためにマッジョ通り沿いに集中していた店舗の入り口を破壊し、商人たちがマッジョ通りからの撤退に追い込まれた可能性が指摘されている^{註6}。同時に、ルネサンス期においてもパラッツォの1階部分に店舗を設けることは、パラッツォを所有する有力家族の重要な収入源であった事が知られているが、フィレンツェでは1427年のカタストが示すように実際の店舗の有無に関係なく店舗スペースに課税されたために採算の取れないエリアでは店舗スペースが設けられなかったために、店舗開口が都市の商業地区に集中した可能性がある。

1階の店舗と中2階は専用の階段で連絡されており、賃借人とパラッツォのオーナーの生活は構造的に分けられていた。この中世を通して広く流布していた構成を窺わせる中2階の窓開口と店舗開口併せを持つパラッツォは後のカタストの分析からわかる富裕層の多い居住エリアに集中していた。

・窓形状と装飾

窓開口のアーチに着目して類型化を行ったところ、半円アーチでアーキヴォールトが中太か尖頭アーチのパラッツォは、その壁面仕上げの石積みと共に13・14世紀に建てられたものが多く、アーチ形状と石積みの壁面仕上げの組み合わせが古い中世的な要素であることを示している。逆に全体が漆喰または2層以上が漆喰で仕上げられたパラッツォは15世紀後半～17世紀に建設または改築されており、それ以前のパラッツォには見られない矩形の窓枠が多く見られた。壁面の仕上げと開口部の形状には年代との相関性があり、ファサードの建設年代ごとに分類されることがわかった。1階のみのルスティカ仕上げについて、C.パロウズは14世紀頃のフィレンツェで限られた一部の有力家族に許された都市政府との紐帯を表すシンボルであったと指摘している^{註7}。

1427年のカタストを基にした分析

1427年のカタスト(課税台帳)のデータを

もとに主に資産額とその内訳についての分析を行い、カタストの地区割ごとに地域的な住民の経済状況について考察を行った。

カタストに記載されている10003件の家長の資産のデータを集計し、資産額と地域、外国からの移民、住居の賃貸と所有との関係性について分析した。ゴンファローネの16の地区割ごとに各戸の資産総額の平均を出し、その最高額がサンタ・クロッチェ・レオン・ネロの1830フィオーリーニ、最低額がサント・スピト・ドラゴの497フィオーリーニであった資産総額2000フィオーリーニ以上の家をランクA、500～1999フィオーリーニの家をランクB、499フィオーリーニ以下の家をランクCと分類したところ、ランクAの割合が高いゴンファローネとランクCの割合が高いゴンファローネは図4のように別れた。



図4 1427年のカタストに基づく地区ごとの貧富網掛け：ランクAの割合が高い地区
斜線：ランクCの割合が高い地区

1427年のカタストからは、古くから建物が密集していた第1の市壁内ではなく第2の市壁内のアルノ川沿いに富裕層が多く居住したことが窺える。また、その領域とルネサンス期の特徴を有するパラッツォの分布に相関関係を確認することができた。

(3)ローマの街路空間に関する分析

一階開口部の比較

カンピドリオ周辺とヴァティカンを繋ぐレクタ通りとペッレグリーノ通りおよび16世紀前半に都市計画の一貫としてつくられた直線道路のジュリア通りに面したパラッツォのファサード構成の調査を行った結果、レクタ通りとペッレグリーノ通りは出入り開口部数が多く、反対にジュリア通りは極端に少ないことがわかった。古代ローマからの古い通りであるレクタ通りと、3本の通りの中で唯一直線道路ではなく最も長い巡礼通りであるペッレグリーノ通りは、間口の広いリネア型住宅が多く確認出来た。これは、間口の狭いスキエラ型住宅が、室内構成や構造はそのままにファサードを隣家と一体化させ、リネア型住宅へと発展したものである。2本の通りは多くの巡礼者が訪れる商業地

域であるため店舗が多く、パラッツォ1階の店舗スペースの確保と15世紀以降の人口増加に伴いスキエラ型からリネア型への移行が進んだ可能性がある。

一方のジュリア通りはカンピドリオとヴァティカンの間を効率よく行き来できるように、フィレンツェ出身のユリウス世がブラマンテらによって1506年に整備した直線道路であり、壮麗なパラッツォが立ち並ぶ厳かな通りであるが、他の2つの通りと比較すると店舗開口は少ないにも拘らず中二階が多く確認された。一般的に中二階は一階の店舗と対で考えられるものだが、フィレンツェの主要なパラッツォにも中二階が多く確認されており、ジュリア通りにフィレンツェ出身者が多く住んでいることが要因とも考えられる。

パラッツォ上階の構成要素の比較

3本の通りのパラッツォの壁面仕上げと装飾の構成から、A漆喰仕上げ+端部石積み、B石積み仕上げ+端部石積みの2タイプを抽出した。石積み仕上げはフィレンツェで多く見られる特徴であり、端部石積みはローマで独自に発展してきたものと思われる。Aタイプはジュリア通りに13件中5件と多く確認され、一方Bタイプはレクタ通りで13件中7件確認された。古代ローマからの直線通りのレクタ通りは庶民的で、16世紀に通された直線通りであるジュリア通りに比べて雑然としている。しかし端部石積みを導入することで巡礼通りにふさわしい街路空間を構成しようとしたと考えられる。ペッレグリーノ通りでは典型的特徴は見られなかった。これは3本の通りの中で最も長くまた屈曲しているだけでなく、ユダヤ人居住地域を通るなどの文化的多様性もあってルネサンス的なデザインの統合が進まなかったと考えられる。

ジュリア通りと16世紀の都市組織

ジュリア通りは、ユリウス二世によって中世の街区を縦断するように、1508年に建設が開始された道路で、産業・商業の中心であったトラステヴェレ地区とサン・ピエトロ大聖堂を擁し新しい信仰の中心であったボルゴ地区を結ぶローマの新しい道路システムとして計画された。ジュリア通りが敷設されるまで、テヴェレ川と並行してシスト橋とサン

タンジェロ橋を結んでいた主要道路は今日のバンキ・ヴェッキ通りからモンセラート通りにかけてであり、テヴェレ川岸は十分に整備されていなかったと考えられている^{註8}。しかし、直線道路としてジュリア通りが敷設されると、その両側にはルネサンス風のファサードを持つパラッツォが立ち並んでいった。言い換えれば、ジュリア通り北部地域におけるユリウス二世とブラマンテによる敷地割りの整理は、ジュリア通りとテヴェレ川に挟まれた街区において、ジュリア通りに斜めに交わっていたそれ以前の都市の軸線をジュリア通りに対して垂直に整えるものであったともいえる^{註9}。

ジュリア通りに面したファサード面の背後に都市のいかなる軸性が隠れているのか、連続平面図による街区ごとの都市組織の分析を行った。分析に当たっては、ローマ大学建築学部作成の実測図^{註10}に描かれた街区平面図をローマ市の地籍図上に合成して連続平面図を作成し基本図とした(図5)。ジュリア通りに結節する小路に着目すると、通りの北東側の小路がジュリア通りに対して斜めに結節しているのに対し、通りの南西側の小路はジュリア通りとほぼ垂直に結節している。北東側の街区の壁体はバンキ・ヴェッキ通りの湾曲に応じて斜交しているのがわかる。バルケッタ通りからカテリーナ通りにかけてのエリアでは、ジュリア通りを挟んで南西側と北東側の両街区とも通りに直交する壁体によって構成されている。最もジュリア通りの都市軸が街区に対して支配的なエリアといえることができるが、モンセラート通りに面した部分はモンセラート通りに直交する壁体が並び、ジュリア通りと直交する壁体と中庭を介して交錯している。

一方で、パラッツォ・ファルネーゼは枢機卿アレッサンドロ(後の教皇パウルス三世)によって購入された後、ジュリア通りとほぼ同時期に大規模な増改築を行っているが、ここではジュリア通りではなくモンセラート通りからヴェンティ小路を経てカポ・ディ・フェット通りへと続く都市軸、もっと言えば古代ローマの街路システムに沿って計画されたことになる^{註11}。ファルネーゼ家は1540年以降、パラッツォの周辺の不動産を購入し



図5 ジュリア通り周辺連続平面図

てファルネーゼ家と関わりのあるものを住まわせるようになり、パラッツォ・ファルネーゼ単体ではなく周辺の市街地を含む都市組織の改変にまで及んだ^{註12}。サン・ジロラモ・デッラ・カリタ通りからシスト橋に至る街区において、壁体がジュリア通りに斜交しパラッツォ・ファルネーゼと平行しているのはそのためであり、中世的都市組織の名残ではなく、『古代ローマの復興』を都市組織のレベルで実現しようとしたルネサンス的都市空間の現出と解釈するのが妥当であろう。

(4)研究成果の位置づけと今後の展望

本研究では、個別に論じられることが多いシエナ、フィレンツェ、ローマの3都市を対象としてパラッツォのファサードの構成と分布から横断的に論じてきた。中世後期からルネサンスにかけてのパラッツォの様式的変化については建築史の立場からルネサンス文化の伝播という視点で論じる欧米(イタリア以外)の研究者は多い。しかし、都市史の視点から、それらの建築様式が都市内にどのように分布していたのか、年代ごとの建築様式が混在しながら都市を構成する実態については論じられてこなかったと言える。本研究では、文化的伝播と同時に経済活動と都市内における様式の分布との関係という新しい視点を提供したと言える。今後は、ルネサンスの都市思想とその現実の関係を明らかにすることが課題である。

- 註1 D. Friedman, *Palaces And the Street In Late-Medieval And Renaissance Italy*, in «Urban Landscapes: international perspectives», London: New York, 1992, pp.69-113.
- 註2 片山伸也,「世俗建築におけるカヴェルノーゾのファサードの意匠性について:中世後期シエナの都市景観に関する研究 その1」,『日本建築学会計画系論文集』第597号,2005年11月,pp.217-222.
- 註3 F. Nevola, "Per Ornato Della Città": *Siena's Strada Romana and Fifteenth-Century Renewal*, in «The Art Bulletin» vol.82, No.1, 2000, p.26-50.
- 註4 M. Quast, *Palace Facades in Late Medieval and Renaissance Siena*, in «Renaissance Siena: Art in Context», Kirksville, 2005, p.52.
- 註5 研究対象の抽出にはG.ファネリが当該世紀の建設としてリストアップしているパラッツォを基とし、現存しないものおよび後世に大幅な改修が施されているものは対象外とした。G. Fanelli, *Firenze -Le Città nella storia d'Italia*, Roma-Bari, 2002.
- 註6 F. Nevola, *Home shopping - Urbanism, Commerce and Palace Design in Renaissance Italy*, in «Journal of the Society of Architectural Historians», 70, no.2 June 2011, pp.153-173.
- 註7 C. Burroughs, *The Italian Renaissance Palace Façade*, Cambridge, 2002.
- 註8 E. Guidoni, *L'urbanistica di Roma tra miti e progetti*, Roma-Bari, 1990, p.112.
- 註9 佐々木学,「ローマ・フィオレンティーニ地区におけるジュリア通りの建設と発展」,『日本建築学

- 会計画系論文集』第594号,2005年8月,pp.1-6.
- 註10 E. Polla, *Centro Storico di Roma*, Kappa, Roma, 2013, Tav.D217-246.
- 註11 E. Guidoni (cura di), *Carta del Centro Storico di Roma 1:1000 Foglio 38 - Campo de' Fiori*, 1985.
- 註12 L. Salerno, L. Spezzaferro and M. Tafuri, *Via Giulia: Una Utopia Urbanistica Del 500*, Roma, 1973, p.104.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- 片山伸也,「14-16世紀のイタリアにおける都市空間の変容」,都市史学会編『都市史研究』1号,2014,pp.56-74,査読あり.
- 片山伸也,「ローマ教皇による都市改造に関する研究 ジュリア通りの敷設と街区形成」,日本女子大学紀要家政学部62号,2015,pp.53-58,査読なし.
- <http://id.nii.ac.jp/1133/00001738/>
- 赤松加寿江,「15世紀フィレンツェのサンタ・マリア・デル・カルミネ聖堂における宗教劇と兄弟会」,都市史学会編『都市史研究』1号,2014,pp.75-87,査読あり.
- 赤松加寿江,「16世紀フィレンツェのロτζアの死」,日本建築学会『危機に際しての都市の衰退と再生に関する国際比較』,2015年,pp.70-75,査読なし.

Kazue AKAMATSU, *Construction and Abandonment of Loggia in Florence*, in «Espaces, Statuts et Institutions: Perspectives Franco-Japonaises en Historie Urbaine» vol. 2, 2013, pp. 47-55, 査読なし.

〔学会発表〕(計2件)

- 片山伸也,「イタリア都市史 中世後期からルネサンス期にかけての都市空間の変容」,都市史学会大会,2013年12月,東京大学.

Kazue AKAMATSU, *Construction and Abandonment of Loggia in Florence*, «Espaces, Statuts et Institutions: Perspectives Franco-Japonaises en Historie Urbaine» (Symposium), Nov. 2013, L' Université Paris-Sorbonne.

6. 研究組織

(1)研究代表者

片山 伸也 (KATAYAMA, Shinya)
日本女子大学・家政学部・准教授
研究者番号: 80440072

(2)研究分担者

赤松 加寿江 (AKAMATSU, Kazue)
京都工芸繊維大学・グローバルエクセレンス・講師
研究者番号: 10532872